

説教 「十字架への道」

(ゼカ 9:9-10、 マル 14:32-42)

2022年4月10日 棕櫚の主日
日本基督教団 仙川教会
大串肇牧師

「ゲッセマネ」という場所で、イエスは弟子たちに「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われ、彼らを残して独りで祈られました(32節)。このときペトロ、ヤコブ、ヨハネという三人の弟子たちを連れていかれました。死んだヤイロの娘を癒された奇跡を起こされた時(マルコ 5:37)、山上での変容の奇跡(同 9:2)の時も同じ三人が指名されました。

イエスの祈りは壮絶でした。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい」と語り、「少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈」った、というのです。

「死ぬばかりに悲しい」とは直訳すると「死に至る」程であるということです。イエスはこの苦しみに共にあずかるように、「目を覚ましていなさい」と弟子たちに告げました。しかし弟子たちは眠ってしまいました。弟子たちの無力さ、理解の欠如が示されています。

そこでイエスはペトロに言われました。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていらなかったのか」。「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」(37-38節)。イエスが祈り、また弟子たちはその間眠ってしまう。このやりとりが三回も繰り返されています。目を覚ませと言われていても目を覚ましておけない。試練や誘惑に負けてしまうのです。「心は燃えていても」つまり熱心であっても「弱い」のです。ここには人間の力の限界や意志の弱さ、サタンの誘惑に負ける弱さが際立っています。しかしゲッセマネの光景は遠い過去の話でも、他人事のような話でもありません。わたしたちのまことの姿なのです。36節をお読みします。

「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

これが有名なイエスの祈りの言葉です。最初にある「アッバ」というのは当時語られていたアラム語です。ギリシア語に翻訳されて「父」と訳されています。異邦人を中心としたマルコの教会の人々に分かりやすいようにギリシア語に翻訳されています。当時のユダヤ人たちはアラム語で「アッバ」、「お父さん」と呼びました。この言葉はもともと幼児が話す言葉と考えられています。しかしそれが祈りの言葉の中で神に対して語られているのは、旧約聖書はもちろん、ヘレニズムやユダヤ教の文献には出てきません。イエスがお語りになった肉声であると言えるでしょう。まことの人としてほんとうに人の苦しみを担い、十字架の苦しみに苦しんでいることの証です。「苦しみ」を取り除いてほしいのは誰もが望むことです。人間の魂からの叫びです。しかしイエスは罪をおかしているからそう叫んでいるのでも、不信仰のゆえに絶望しているのでもありません。「アッバ、父よ」とまるで幼子が父親に信頼しきっているかのように親しく呼びかけている。神を信頼しているのです。だからこそ、「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と祈ることができたのです。試練に打ち勝ち神の御心に委ねて生きること。その勝利の道がゲッセマネの祈りの中に指示されていると言えるのではないのでしょうか。そこで 38節前半をもう一度お読みいたしましょう。

「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。」

御心になるようにイエスは祈り、弟子たちが誘惑に陥らないように祈りました。この祈りはどこかで聞いたことがありますか。それは主の祈りです。「(われらの) 父よ…」という呼びかけで始まり、「試みに遭わせず悪から救い下さい」という祈りで終わっています。このゲッセマネの祈りの言葉はイエスの教えられた祈りによって、更に新しい光が投げられています。つまり、十字架の道はわたしたちのなすべき祈りとして教会に通じているのです。試練や誘惑に負け、わずか一時も目を覚ましてられない怠惰と不信仰。それだけじゃない。イエスが逮捕されるや否や、50節「弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった」。これがわたしたちの現実の罪の姿です。背信と拒否そして逃亡。それがゲッセマネで起きた出来事です。

しかしみなさん、「アッバ父よ」と祈り、主の祈りを唱えて礼拝するならばわたしたちは誰でも救われるのです。この罪と背信の闇のゲッセマネの園で、試練や誘惑に打ち勝つ、勝利の奇跡が起こる。それはわたしたちのために十字架につき、神のみ怒りを一身に受け、愛の御心をなしとげられるイエスの憐れみの故です。

「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります」と言われたように、神の愛の奇跡が今朝わたしたちにも起こるのです。わたしたち仙川教会の礼拝が神の愛と恵にみちた祈りの園になるのです。お祈りたしましょう。

「アッバ父よ、どうか御旨がなりますように…
試み遭わせず悪より救い出したまえ」